

# 町づくりと文化

田 村 明

まちづくりと文化

## 1. はじめに

高度経済成長の頭打ちと低成長社会への転換にともなって、最近多くの自治体が積極的に文化の問題を取上げるようになってきた。その中では従来、教育委員会の中の社会教育部門の一部門として文化財や美術館などを扱ってきた狭いいみの文化だけではなく、巾広い市民との接触の中で文化を考えていったり、あるいは行政そのものを文化的にならしめようという動きも見られる。

それに加えて、国でも従来の経済偏重、生産傾斜に対して、文化の問題を諸計画の中で取上げるようになってきた。

今年1月24日の経済審議会で出された「新経済社会7ヶ年計画の基本構想」には、「ゆとりと生きがいのある社会を求めて」という副題が付けられており、国民の意識が物財中心から心の豊かさへ、量的拡大よりゆとりと生きがいへ、経済から文化へとその重点が移行しつつある」とのべている。

また同じく1月14日に国民生活審議会の長期展望小委員会の報告は、「人間味あふれる社会」という題が付せられ、21世紀の国

民生活像として文化の問題が大きくとりあげられており、芸術性の高い文化ばかりでなく、情感の世界の強調、独特の風土や国民性による異なる文化の多様性、地方的、個性的な文化が強調されている。そして21世紀は産業主義と抗産業主義が併存、拮抗する新しい時代であり、産業化の弊害を除去して人間味豊かな生活を築こうとする人々の志向との間に新しい均衡を求める社会を形成すると結んでいる。

このように、「ゆとり」「生きがい」「人間味」などが強調され、文化が取上げられるのは極めて望ましい傾向である。

第2次大戦直後、文化国家の建設が提唱され、日本復興の進むべき道とされた。ところが昭和30年に「もはや戦後ではない」という言葉が聞かれ、物質生活においては戦前の水準を回復したころからいつしか文化国家という言葉は聞かれなくなり、神武景気、岩戸景気というまことに景気のよい用語が乱発され、所得倍増、経済成長、経済大国という用語におきかえられ、これに対して公害、環境破壊などが対置された。これらはいずれも金と物の世界であり、その間にいつのまにか

文化はおき忘られてしまった。

ようやく昭和48年のオイルショックあたりを契機に再び文化の問題が取上げられるようになってきた。いつでも経済的にはそう恵まれない時に文化の問題がとりあげられる。しかし文化は経済成長の代替としてだけ取上げられるものではないはずである。文化とは量に対する質の概念であり、本来なら経済成長の時こそ高い豊かな文化性を附与できるはずなのである。もちろん文化が取上げられることは好しいことであるが、時の流れにだけ左右されるのではなく、このあたりで腰をすえた文化への取組みが必要なのである。

## 2. 「町づくり」の文化的特性

腰をすえて考えてゆかなければならぬ文化の問題は極めて巾広いが、その中でとくに「町づくり」の問題を考えてゆきたい。

町づくりは最も端的には、ひとつ技術の問題だと誤解されがちである。たしかに町を構築するための材料の開発や、これを利用する技術の問題があつて町づくりが始められたことも事実である。しかし、たんに材料や技術だけで町が作られてゆくものではない。それらは町づくりのひとつの手段である。「町づくり」とは、その町の意思—それは時には専制君主であり、また少数の貴族であり、あるいは現在のように多くの市民であったが—の価値観にもとづく目的を実現しようとして行なわれるもので、そこに技術をふくめて町全体の価値体系の表現として行なわれるものである。それはすなわちその町のもつ文化の表現であり、「町づくり」とは町の文化の所産なのである。もちろんそれは芸術文化といった

せまい意味の文化だけをさすわけではない。日常的な個々の家の生活、毎日の生活の中にある文化の表象であるが、それはまた長い間に独特の香りを有してくる。

町づくりは文化なしでは語りえないし、とくに文化という用語を用いなくても、すでに文化の問題に深くかかわっているのである。しかし、他の文化とは表れ方に以下のようにいくつかの特徴がある。

### (1) 長期継続的な蓄積として表現されること。

ヨーロッパではたった一つの建築物のために三百年、四百年とかけて完成させていることがしばしば行なわれている。その上で完成されたフィレンツエのサンタマリアデルフィオーレやケルンの大聖堂はその持続力と蓄積としての重みを物語っている。そして町全体としても、個々の建物は建替っても、継続的に自らの文化を築いていっている。

町づくりは本来一個の建築物以上に、はるかに長い歴史性をもち、生きて新陳代謝しながらも、その蓄積の上に成立している。町づくりは、単発的な線香花火的な文化とは自ら異なる本質を有している。

### (2) 総合的な全体として表現される。とくにさまざまの物の相互の関係として現れる。

町づくりは長期継続的に行なわれるのだから、ある短期間に急にできるものではない。そこで出来上がってゆく個々の建物や橋、公園などが個々にも文化的な配慮が加えられていることはもちろん極めてのぞましいことであ

る。

しかし、個々のものは実は最後の仕上げをなすもので、それより基礎になる町づくりは総合的な町を考えた基本的なものが骨格となり水準をつくる。ヨーロッパの町の広場は、町の基礎であり、シャンゼリゼーのような大通りが町の骨格になっている。

さらに文化としての町づくりにとっては、個々の建物だけでなく、建物と建物、道と建物、公園と建物、彫刻と建物などの相互の関係がどのように配慮され、それらの関係の総和として町づくりは行なわれることである。

したがってひとつの芸術作品はあるにこしたことではないが、それだけでは必ずしも芸術的な町とも、文化的な町ともいえないものである。

(3) ハードな物だけでなく、町の空間でくりひろげられる生活や、町を支え町をつくってゆく意識やシステムをふくめて表現される。

文化とはもともと物質だけのいみではなくむしろ心とか精神的なものを重視している。町の空間でのイベントや、人々の感じ方、町とどのように心で通いあっているか、それがどのようにして町を維持し、あるいは新しいものをつくってゆくかの価値体系や、それを具体化できる社会意識や、社会システムもすなわち文化をつくるものであり、また文化の所産である。

(4) 現代の町づくりは意見の異なる数多くの人々によって実現されてゆく、市民の共同作品であ

る。

町は現代では特定の人だけによってできるものではない。意思や願望や価値感も異なりながら、それらの矛盾をできるだけ少なくし、共通の理解を高めた総和として実現されるものであり、決して誰か一、二の人によって作られるものではなく、長い期間の市民全体の共同の作品なのである。

### 3. 文化としての町づくりの価値観

#### (1) 美しさ

町づくりの価値観にはいろいろあるが、そのひとつは当然に、「美しさ」ということである。美しさについてはいろいろ美学的な考察があるが、要するに「用以上の用を認める」ということ。「あるいはもっと端的に表現すれば、「用以外に、価値のある無駄を認めること。」ではないかと思われる。

人間は食って寝てという動物でもあるが、またそれ以上の存在でもあり、それだけでは満足しない。生活の必要性の中でおいまぐれながらも、いつもそれだけでないものを求めてきた。価値ある無駄を認めるのは、人間が人間であることの証明ともいえる。

我々の住み働く町は、ただの「ねぐら」や「機械」であってよいはずはない。ひとつの橋でも、ひとつの建物でもそうだが、町全体はもっとも美しいものであるべきでしょう。それが人間としての共同の蓄積であり、創造的な営みもあるのです。

もちろん美的価値は時代によっても、人によっても異なるが、それは「美しさ」を否定するものではなく、むしろ異なる「美しさ」

は多様に存在するということなのである。そしてとくに町での「美しさ」は先にも述べたように個々の要素だけでなく空間の相互的な関連性における美しさが重要な要件である。個別的な建物、道路、公園、橋などがそれぞれの立場での美しさを考えるとともに、それ以上にまず相互的な関係における美しさとしての調和や統一性、その中における個性やコントラストなどを考えてゆくことが行なわれている。その中には高さ、形、窓、色彩、外壁の材質、屋根の形や色、等々を町全体として考えてゆく。そこに全体としての美しさがかもしれない、実は美しさだけではなく、単一の機能や用途では忘れられ、欠落していた重要な文化的価値を加えることになるのである。

## (2) 地方性、伝統性

町づくりは、他の物とちがって原則的には移動できない。それぞれの場所において行なわれるもので、独特の地理的、歴史的条件の風土の上に築かれてくるものである。人の顔がそれぞれ異なり、その生いたちも異なるよう、町はもっと長い歴史をもっている複合体だから、独特の個性ある特色をもっている。屋根の形、瓦の色や種類、家々の間取り、植物など、かっては独特の個性ある地方性をもち伝統として継承されてきた。

いつのまにか、これらの地方性は、地方、田舎という価値を中央に対する低位のものとされて、独特の価値が失なわれてきた。地方性や個性、そこにある伝統性は、古いもの、見すぼらしいものではなく、それぞれが意味をもって生れたものであり、むしろ個性ある地方性や伝統性を生かしてゆくことがようや

く見直されてきた。

フランスのニュウタウンでは、各ニュウタウンごとにカラーリストがいて町の色彩全体を考えてコントロールしているが、そこで基礎的色彩としては、土の色を重視している。そしてその地方の土の色を乾いた色、ぬらした色などを色彩票にとって、これらを基礎にカラー・コンディションを考えてゆく。まさに風土の特色である土そのものから出発して、独自の地方性を確保しようという考え方である。

## (3) 独創性

しかし、一方町づくりの技術や方法は普遍性をもち、国際性をもっているからそれが無批判に利用されて、町づくりを画一化してしまった。

もちろん、目を外に開いて新しい刺激を受けることは必要だが、それはたんに模倣ではなく、それぞれ独自の町づくりの中で消化されて、自分たちにあった新しいものとして生みださなければならない。

町づくりは長い時間をかけて行なうので、決して一時的に奇をてらうべきではないが、しかし、個性を失なった技術だけの慢然とした利用や、模倣だけに終るべきものではないはずである。そこにいる多くの人々によって、創意工夫が加えられ、独創性を發揮して、古い伝統に加えて、新しい魅力を生み、その中に自から新しい伝統を生み出してゆく不断の努力が必要であろう。

## (4) 生活性

町は死んだものではなく、日常の生活の中に生きて動いている。どんなに全体として美しく独創的であっても、生活から全く遊離し

てしまえば、それはただ記念碑にしかすぎない。

町は大きな広いモニュメンタルな空間も必要だが、また、狭い小さな露地にも市民の生活が息づき、その生活を支え、また逆に市民によって支えられている。その生活の中に息づいているとき、町は本当に町らしくなる。そして日常的な生活の中で互に工夫をこらし、町は独特の個性をそなえ、何ともいえない生活の中の美しさが醸しだされてくるのである。かつて東京にもいくらでもあった露地に、お互に植物で飾った生活のにじみでたスペース、互にきれいで掃き清められた道路、それらは生活化された町の美しさである。そして生活性はまた巾広い市民の町への愛情と関心によって成立つのである。

#### 4. 横浜の町づくりと文化

横浜の町づくりでは文化という用語は折にふれて用いてはいるが、あまり大々的には言っていない。それよりも実際に町づくりを文化的に行なってゆくことが重要である。昭和44年の市の中期計画では「町を市民の共同作品とする」という言葉でしめくくった。町は市役所だけが作るものではない。また事業や法規だけで作るものではない。それらはむしろ手段であって、共同作品の名に値するような少しでも質の高いもの、美しいもの、たのしいものを、市民皆の手で「バラバラではなく共同の目標をもって作ってゆこう」というのである。そのためには、お互のルールづくりも必要だし、環境を美しくするためのアーバンデザインやさらにもろもろの事業や法規などを活用してゆく必要がある。

しかし、ただうわついた文化性をいうだけでは町はよくならない。そこで第一には、総合的視点に立った都市の基本的な都市構造や都市装置がしっかりとしなくてはならない。そして第二に、これと併行して町づくりの文化的価値あげた「美しさ」「地方性」「独創性」「生活性」の価値観を認めることである。「美しい」ものは美術館の中にしまわれた美、シンフォニーホールの中で行なわれる美だけではない。町とは美しいものだし、美しくあるべき共同作品なのである。

その上で第三には、これを実現してゆくための戦略と演出が必要であり、総合的な都市経営の組織、その中に文化性をそなえたチーム、とくに空間の創造を可能にするアーバンデザインチームが必要である。

そして第4には、市民と共同して町づくりをよりよくしてゆける方法が必要なのである。それから若干実例をひろいながらみてみよう。

##### (1) 都市構造の基本

横浜は昨年9月大通公園という長さ約1.2キロの細長い公園を完成させた。これは丘にはさまれた狭い横浜の都心の中心にあるが、たんに公園というより横浜の都心構造とその質をきめる重要なみをもっている。

戦後十分な都市計画的対応のできなかった横浜都心は、地下鉄や、首都高速道路の乗り入れがぜひとも必要である。そこで当初この細長い公園に高速道路を高架で建設することが一番良く安くできると考えられた。しかし道路はただ道路のためだけに作るのではない。都心をよりよくするために作るのである。そこで長い国との話し合いの結果、この大通公園の上を高架で通る予定であった道路を半地下

にし、別のルートを通過することによって都市の中心に緑の多い、青空を仰げる公園が生れたのである。

もし、この都市構造の質の基本であやまってしまうと、横浜のように狭い都心ではかなり決定的に空間の質がきめられてしまう。それは金も時間もかかる大きな問題であるが、このような都市の基本的な構造的な計画段階での質を論じて、できるだけの手段を加えておかないと、あとでいくらお化粧をしたり、

細い手を加えただけでは文化的な町とはいえない。文化とはアクセサリーではない。お化粧の前の地肌を、そして都市としての体そのもの、健康そのものをまずととのえなくてはならないのである。もちろん現在道路としても立派に機能しており、それに加わえて大通公園という将来の横浜の都心軸として重要でありそして今後の発展のためにも貴重な刺激となる。何十年間にもわたって意味をもつ財産を得たのである。



大通公園

## (2) 公共施設の文化性

しばしば述べているとおりに町づくりは行政だけで行なうものではない。実際に市が直接にタッチするものは道路、下水、港湾などの基幹施設を除けば僅かなものである。しかし、それについても、とくに都市環境に関連のあるものについては、文化的価値について出来

るだけのことをしておく必要がある。そして横浜市以外の公共主体に対しても極力そのような協力をしてもらうべきであろう。

国道16号線は、車道をせばめることによって歩道を拡張し、街路樹を植え、地元の協力金もえてタイル舗装のたのしい歩道にした。また首都高速道路の換気塔は、うまくビル建

築とだきあわせて他から見ると全く感ぜられない。また金沢埋立地の住宅公園にもアーバンデザイン的見地からさまざまなデザイン的注文を実行してもらつている。

また市自身としても、前に述べた大通公園

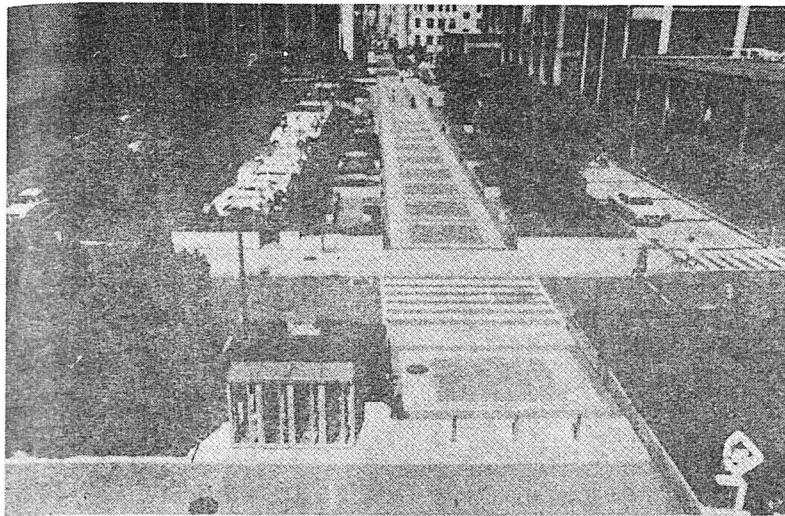
には集会やバザールなどのイベントも可能な石の広場や、たのしい水の広場を設け、ロダンとヘンリー・ムーアの彫刻をおいた。ミナトヘゆく三つのルートは絵タイルを敷いてたのしく歩き、誘導できるプロムナードをつく



プロムナードの絵タイル

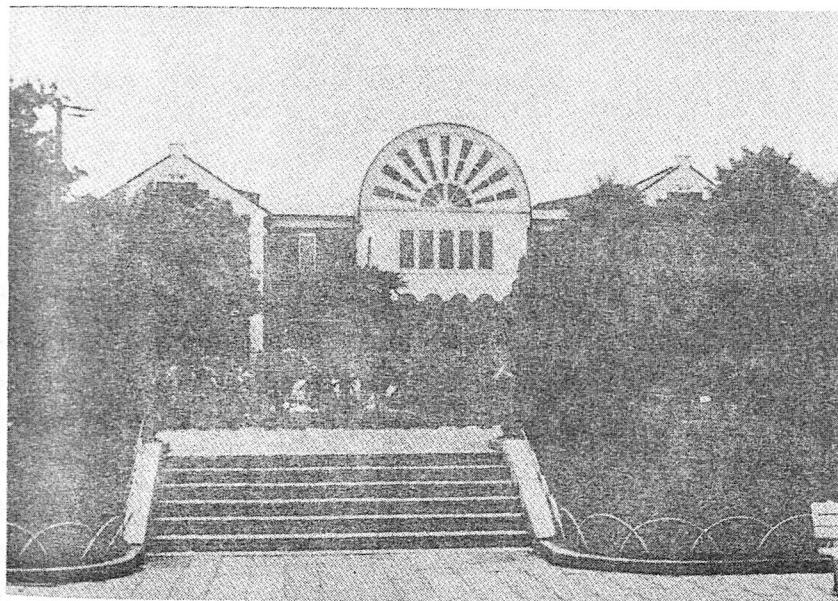
り歩道も整備した。そして地下鉄にはデザイン委員会を設けてデザインポリシーを定め、それぞれ著名なデザイナーに、駅の外壁、電車、サイン、ごみ箱、ベンチ、自動券売機、などを分担してデザインしてもらい、デザイン委員会で検討しながら作っていった。また地下鉄の復元工事を利用して「くすのき広場」をつくり、少し工夫をすれば楽しい空間が得

られることを実践してみせた。横浜でもっと多く建てられたのは学校だが、学校デザイン委員会を設けて、学校を市民も利用しやすく、子どもたちにとってもたのしいものとする工夫がなされた。



### くすのき広場

そして港の見える丘公園の一角には、大仏次郎から寄贈された書籍、資料などを入れるための大仏次郎記念館が建設された。小さな建物であるが、横浜らしい風物をつくりあげ、山手という雰囲気の中に、新たな伝統をつくりあげるものになっている。



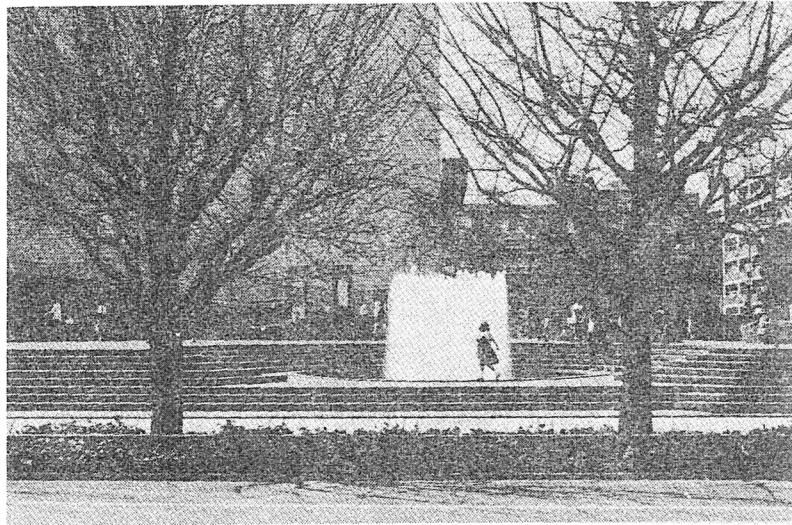
大仏次郎記念館

(3) 建築主への協力依頼と市民側の盛上り。

美しさやたのしさの要素が公共施設にも加わってきたが、これはただ一方的に公共投資をするのではなく、これによってその周辺の

人々にも金銭的負担をしてもらうとか、壁面線後退をしてもらうとか、いろいろな手段を構じて市民側からの協力を求めている。

とくに山下公園周辺とか大通公園周辺については、建物と建物の関係、建物と公園や歩



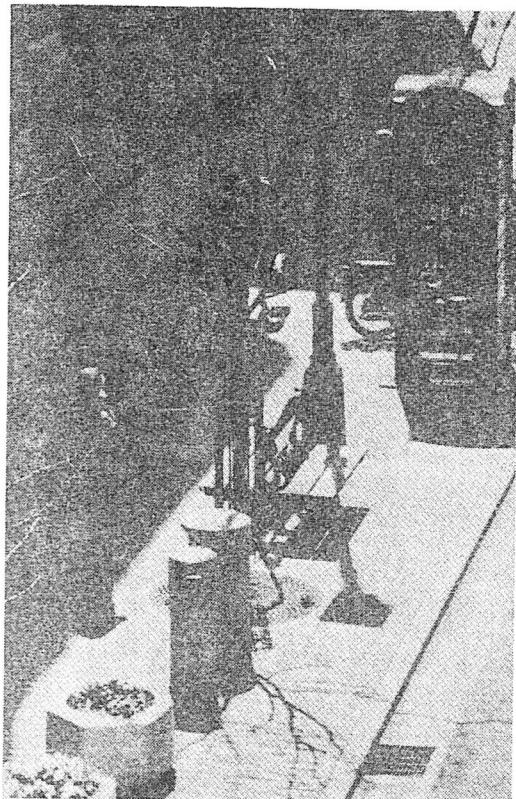
山下公園前ペア広場

道との関係とよりよく生かしてゆくために、長い間の説得や、話合いによって、この地区的質を少しでも高めてゆく努力を、建築主側に行なってもらっている。これにより県民ホールと産業貿易センターの二つのビルの間には、それぞれが協力しあって、ペア広場が生まれだされている。

このような全体の流れの中で、馬車道商店街は、自発的にアーケードを撤去し、歩道を広げ、街路樹をうえ、美しい町をつくってゆく協定を自分たちで行なって面目一新をした

町づくりを行なった。行政はこれに協力をする役割であるが、自分たちの壁面線の後退など、一そう広い公的な共同空間を作る努力をしている。またこれに刺激を受けて、伊勢佐木町商店街も、モザイクタイルをはった長さ400メートルのモールをつくりあげた。

いずれも商店街がすぐれたリーダーをもつて自主的に運営され、さまざまな困難を行政と協力しながら解決して、全く面目をかえた町をつくりあげたのである。



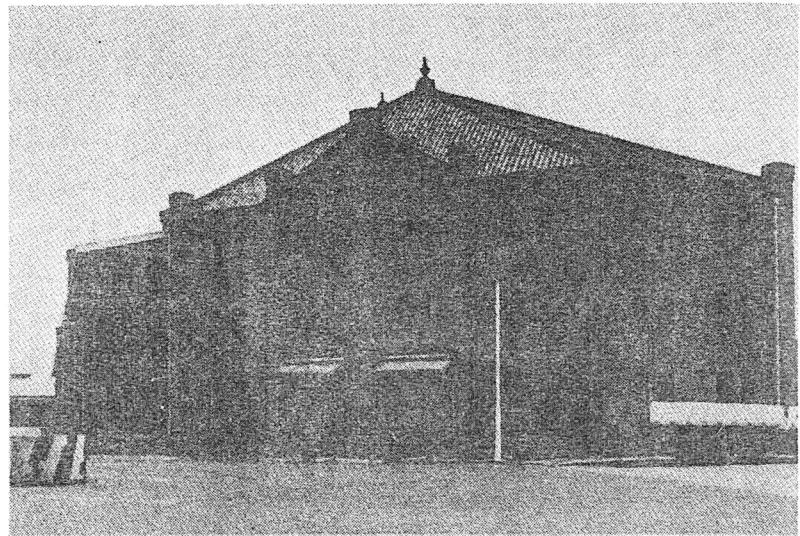
馬車道歩道の拡巾

#### (4) 保存と復元

横浜はもともと歴史も浅いが、その上関東大震災、戦災、接収という中に古いものをほとんど喪ってしまった。しかし、文明開化以来のヨコハマらしい個性を残すものも僅かながら存在している。

山下公園に面する七番館のレンガ建築は番館といわれる唯一の現存のものだが、その前面だけを建築主に保存してもらっている。また将来、新港埠頭にある妻木頼黄作の壮大な煉瓦倉庫は、これを港一体の再開発とつなげうまく生かしてゆけば、横浜でなくてはな

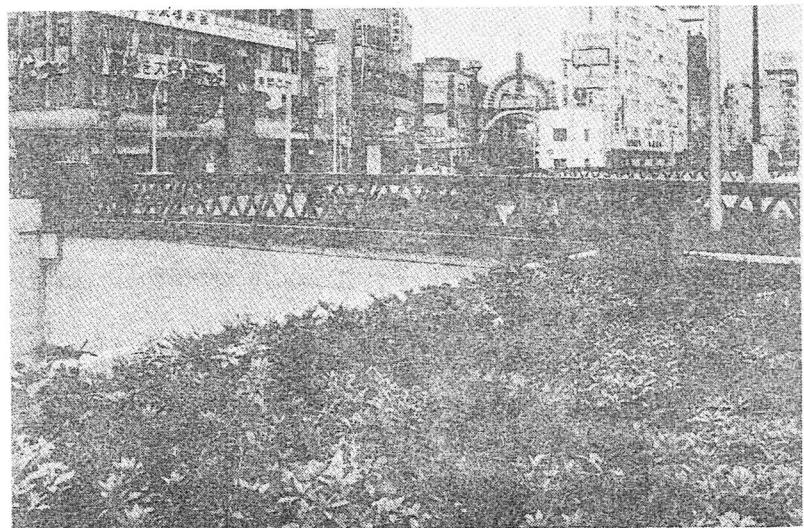
らぬ姿をつくりあげることが可能であろう。また三菱ドック内にある石積のドックも古代競技場を思わせるような荘重なもので、今後の計画の中での保全と活用が考えられている。



新港埠頭煉瓦倉庫

横浜が幕末に生れたとき、外人居留地と日本入町を含めて島状の土地であり、入口には関所があり吉田橋という橋で出入をきびしく

おさえられていた。明治2年吉田橋は日本で始めての鉄橋となり鐵の橋（かねの橋）とよばれた。この橋はその後かけかえられて4代



吉田橋



吉田橋

目になっていたが、高速道路を地下化することになったため、これを川に見ててその上に吉田橋を復元することにした。これは伊勢佐木町と馬車道の両者をつなぐ橋でもある。橋は地下にも広場のある2段の橋、そして高欄には、写真や錦絵でみるような重厚なトラスの橋をしている。現在の高欄のような軽やかなものとちがい、黒い鋳物で、ひとつの風景のポイントになっている。それは道路の地下化のときから継続して考えられてきたもので、このような復元も、単発の思いつきではなく、全体の育合性と、長期の継続性、そして地元負担という市民性によって成立つてい るものなのである。

これらの具体例を詳細にのべればきりがないが、こうした町づくりのための文化性を高めるための行政の内部の問題として、単発の

文化の問題としてではなく、総合的継続的に蓄積を重ねてゆくための総合的実施組織として企画調整局が作られ作用したことが大きな役割を果している。それに全国の自治体にまだないアーバンデザインチームを内部に持つことで、いずれの町にもそのような町づくりの文化性を高めてゆく仕組みが生れ育ってゆくことが必要であろう。

( 横浜市技監 )